

表4 1期生と2期生のベースラインにおける認知検査の平均得点と共分散分析の結果

領域	検査項目	介入群 (N=119)		対照群 (N=94)		共変量		共分散分析						
		平均値	SD	平均値	SD	年齢	教育年数	群	地域	期	群*地 域	群*期 域	地域* 期	群*地 域*期
記憶	直後 遅延	13.2	3.2	12.7	3.4	*								
		12.0	3.5	11.7	3.8	**				**		*		
知能1 (処理速度)	知識	18.2	4.6	16.8	5.6		***							
	絵画	11.5	3.3	11.1	3.1	*	**							
	符号	52.1	10.5	49.9	10.5	***	***							
知能2 (処理速度)	知識	12.7	2.4	12.1	2.9		***							
	絵画	11.3	2.3	11.2	2.3		***							
	符号	13.2	2.1	13.0	2.2	**	***							
言語	音	13.4	3.9	12.7	4.2		**							*
	意味	17.5	4.9	16.8	5.1		***						*	
	並行	9.3	2.3	9.1	2.4	***	*							

知能1:粗点 知能2:年齢群別評価点

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

表5 1期生(2回目)の年齢と教育年数

群	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	
介入	年齢	55	68.9	5.17	59	81
	教育年数		13.5	2.62	8	19
対照	年齢	62	69.6	4.97	58	82
	教育年数		12.0	2.07	8	16

両群のベースラインと2回目の平均得点を比較するため、回(1回目と2回目)を被験者内変数、群を被験者間変数とした2因分散分析および、年齢と教育年数を共変

量とする共分散分析を行った(表6)。

2回の得点変化は、分散分析では、絵画、符号、言語の並行課題で有意であったが、年齢と教育年数を考慮した共分散分析では、有意とはならなかった。また、いずれの分析においても回と群との交互作用は有意ではなかった。年齢と教育年数の共変量の効果は全般に強く、各領域の検査項目で有意であった。

表6 1期生のベースラインと2回目の認知検査得点の比較

領域	検査項目	介入群 (N=55)		対照群 (N=62)		分散分析		共変量		共分散分析			
		ベースライン	2回目	ベースライン	2回目	回	回*群	群	年齢	教育年数	回	回*群	群
記憶	直後 遅延	12.9	12.7	12.9	13.1				*	*			
		11.8	12.2	11.5	12.2				**	*			
知能1 (処理速度)	知識	19.1	19.0	17.1	17.3			*		***			
	絵画	11.8	12.7	11.1	12.4	***				***			
	符号	52.0	53.8	50.0	52.1	***				***	*		
知能2 (処理速度)	知識	13.2	13.3	12.2	12.4			*		***			
	絵画	11.5	12.4	11.2	12.2	***				***			
	符号	13.3	13.8	13.1	13.6	***				*			
言語	音	14.6	13.9	12.4	12.3			**					*
	意味	18.0	17.8	16.7	17.0				*	**			
	並行	9.4	10.5	9.2	9.5	***			***				

知能1:粗点 知能2:年齢群別評価点

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

#### D. 考察

最初に、参加者の構成について検討する。2期生を加えた2年目においても、3地域の年齢と教育歴の構成は異なり、多摩区の介入群は他の地域、群より年齢が低く、教

育年数が高かった(表3)。2つの共分散分析(表4, 6)で示されたように、認知検査得点には年齢や教育歴が影響する。高齢者の認知機能の変化を比較するためには、介入群と対照群の年齢と教育歴の構成を揃

える必要がある。引き続き、対象者を追加して、各地域および各群の年齢と教育歴を揃えていきたい。

次に、1期生の9ヵ月後の変化を検討する。表6に示されたように、1期生のベースラインと2回目の得点変化が認められた検査項目は、絵画と符号、言語の並行課題であった。これらは流動性知能ないし遂行機能に分類される課題である。一方、これらの得点差は年齢と教育年数を共変量にする共分散分析では消失した。認知機能検査の得点は、年齢や教育歴などによる変動が大きく、時間の変化や練習効果、介入効果などによる変動は相対的に小さく、変化が検出しにくい可能性が示唆される。介入効果を捉えるためには、介入効果以外の要因をできるだけ統制する必要がある。今後は2期生の2回目のデータも加わり、データ数が増える。次年度は年齢や教育歴のより等質な介入群と対照群を選び介入効果を検討するとともに、今回検討しなかったその他の要因（例、読み聞かせボランティアの活動頻度やその他のボランティア活動の有無）も考慮して介入効果を検討する予定である。

今回の分析では各検査の得点（粗点）を用いて2回の変化を比較した。粗点による分析では加齢による低下の成分が考慮されておらず、介入効果が過小評価される可能性がある。年齢や教育歴を考慮した評価点による検討が必要である。今回用いた認知機能検査で74歳までの年齢群別評価点<sup>10)</sup>が算出できるのは、知識、絵画、符号の検査のみである。その他の検査では60歳以降を1群として高齢群の標準値が示されているが、細かな年齢群別基準点は用意されて

いない。最近、健常高齢者を対象とする検査得点がいくつか報告されている<sup>13, 15, 20, 21)</sup>。次年度はこれらの資料を参考に、評価点による分析を試みたい。

## E. 結論

高齢者による絵本の読み聞かせボランティアに応募してきた介入群と健診のみを受ける対照群を対象に、記憶、言語、知能、処理速度に関する認知検査課題を用いて、2年目の認知機能評価を行なった。1期生2期生を合わせたベースライン評価の結果、いずれの群も平均得点は健常高齢者の基準点を上回り、今回の参加者は全般に高い認知機能を持つ高齢者であることがわかった。1期生の2回のデータを基に予備的に介入効果を検討したところ、年齢や教育年数による差が大きく、今回はこれを超える介入効果は認められなかった。引き続き追跡を続け、本プログラムの有効性を検討する。高齢者の認知機能を高め社会貢献を促す本プログラムは、高齢者のQOL向上に寄与することが期待される。

## 文献

- 1) Schaie KW. Intellectual development in adulthood. 1996; Cambridge University Press.
- 2) 辰巳 格. [招待論文]成人における言語機能の加齢変化. 電子情報通信学会技術報告 2004; TL2004-15:19-24.
- 3) Hedden T & Gabrieli JDE. Insights into the ageing mind: A view from cognitive neuroscience. Nature Reviews Neuroscience 2004; 5: 87-96.
- 4) Nyberg L, Backman L, Ernground K, et al.

- Age differences in episodic memory, semantic memory, and priming: relationships to demographic, intellectual, and biological factors. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 1996;51B: P234-P240.
- 5) Wilson RS, Beckett LA, Barnes LL, et al. Individual differences in rates of change in cognitive abilities of older persons. *Psychology & Aging* 2002; 17: 179-193.
  - 6) Craik FIM, Byrd M, & Swanson JM. Patterns of memory loss in three elderly samples. *Psychology & Aging* 1987; 2: 79-86.
  - 7) 中里克治, 下仲順子. 老年期における知能とその変化. *社会老年学* 1990;32: 22-28.
  - 8) Ishizaki J, Meguro K, Ambo H, et al. A normative, community-based study of Mini-Mental State in elderly adults: The effect of age and educational level. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 1998; 53B: P359-P363.
  - 9) Ball K, Berch DB, Helmers KF, et al. Effects of cognitive training interventions with older adults. *JAMA* 2002; 288: 2271-2281.
  - 10) 品川不二郎, 小林重雄, 藤田和弘, 前川久男(共訳編著). 日本版 WAIS-R 成人知能検査法. 1990; 日本文化科学社, 東京.
  - 11) 綿森淑子, 原寛美, 宮森孝史, 江藤文夫. 日本版/RBMT リバーミード行動記憶検査. 2002; 千葉テストセンター, 東京.
  - 12) 笹沼澄子. 健常老人および痴呆老人における高次脳機能検査の成績. *老年精神医学* 1988;5:503-516.
  - 13) 佐久間尚子, 田中正之, 伏見貴夫, 他. 48 カテゴリーによる健常高齢者の語想起能力の検討. *電子情報通信学会技術報告* 2003;TL2003-13:73-78.
  - 14) Lövdén M, Ghisletta P, & Lindenberger U. Social participation attenuates decline in perceptual speed in old and very old age. *Psychology & Aging* 2005; 20, 423-434.
  - 15) 安部光代, 鈴木匡子, 岡田和枝, 他. 前頭葉機能検査における中高年健常者日本人データの検討—Trail Making Test, 語列挙, ウィスコンシンカード分類検査(慶応版)—. *脳神経* 2004;56:567-574.
  - 16) Gilewski MJ, Zelinski EM, & Schaie KW. The memory functioning questionnaire for assessment of memory complaints in adulthood and old age. *Psychology & Aging* 1990; 5: 482-490.
  - 17) 数井裕光, 綿森淑子, 本多留美, 他. 日本版リバーミード行動記憶検査(RBMT)の有用性の検討. *神経進歩* 2002;46: 307-318.
  - 18) 数井裕光, 綿森淑子, 本多留美, 森悦朗. 日本版日常記憶チェックリストの有用性の検討. *脳神経* 2003;55:317-325.
  - 19) Wilson RS, Mendes de Leon CF, Barnes LL, et al. Participation in cognitively stimulating activities and risk of incident Alzheimer disease. *JAMA* 2002; 287: 742-748.
  - 20) 伊藤恵美, 八田武志, 伊藤保弘, 他. 健常成人の言語流暢性検査の結果について—生成語数と年齢・教育歴・性別の影響—. *神経心理学* 2004;20:254-263.
  - 21) 原田浩美, 能登谷晶子, 中西雅夫, 他. 健常高齢者における神経心理学検査の

測定値一年齢・教育年数の影響一. 高次  
脳機能研究 2006;26:16-24.

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市  
部高齢者による交流型ヘルスプロモーション  
プログラム: "REPRINTS" の1年間の歩み  
と短期的効果. 日本公衆衛生雑誌 (投稿中).

##### 2. 学会発表

佐久間尚子, 呉田陽一, 伊集院睦雄, 他.  
健常高齢者の認知機能: 絵本の読み聞かせ  
ボランティア研究のベースライン健診より.  
日本心理学会第 69 回大会, 東京,  
2005.9.10-12.

佐久間尚子, 呉田陽一, 伏見貴夫, 他. 高  
齢者の世代間交流型社会貢献プログラム  
"REPRINTS" の2年目の報告; 2. 高齢者の  
認知機能. 日本老年社会科学会第 48 回大会,  
兵庫, 2006.6.24-25 (発表予定).

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

#### 研究協力者

呉田陽一 (東京都老人総合研究所・福祉と  
生活ケア研究チーム)

伏見貴夫 (北里大学・医療衛生学部)

伊集院睦雄 (東京都老人総合研究所・自立  
促進と介護予防研究チーム)

辰巳 格 (LD・Dyslexia センター)

都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”  
— 3. 児童の高齢者イメージに及ぼす短期的影響 —

分担研究者 吉川武彦  
中部学院大学大学院人間福祉学研究科教授

“REPRINTS”ボランティアによる絵本の読み聞かせ対象となった児童について、彼ら  
の高齢者に対するイメージの現状およびイメージに影響する要因、さらにはそのイメージ  
が“REPRINTS”ボランティアとの約半年間の交流を経てどのように変化したかを調べた。

調査対象は川崎市立 A 小学校・中央区立 B 小学校の全児童である。初回調査では 568 人  
（うち A 校 441 人）を対象として、SD 法による高齢者への情緒的イメージおよびその関  
連要因を、追跡調査では 466 人（うち A 校 355 人）を対象として“REPRINTS”ボラン  
ティアとの交流頻度および高齢者イメージの変化を分析した。

その結果、学年が低い・祖父母等との交流経験が多い児童ほど、高齢者イメージが肯定  
的であった（学年： $p<.05$ 、交流経験： $p<.01$ ）。一方、“REPRINTS”ボランティアとの交流  
頻度が高い児童ほど高齢者イメージが肯定的であった（ $p<.001$ ）が、因果関係は未だ明ら  
かではなかった。

今後も継続的に交流活動を行うことにより、“REPRINTS”ボランティアとの交流が児童  
の高齢者イメージに有意に肯定的な影響を及ぼすことが期待される。

#### A. 研究目的

平成 16 年度より、高齢者による知的ボ  
ランティア活動—絵本の読み聞かせ—を通  
じた児童との世代間交流型介入研究

“REPRINTS”（Research of Productivity by Intergenerational Sympathy）を開始した。こ  
の“REPRINTS”ボランティアは、直接的  
には地域高齢者の社会的役割と知的能動性  
の維持を目標とするものではあるが、読み  
聞かせの対象となる児童が肯定的な高齢者  
イメージを抱き高齢者への親しみや尊敬の  
念を深めることで、児童の情操教育の一助、  
つまり地域での世代間交流全体が活性化す  
ることをもねらいとしている。

高齢者に対するイメージは、その悪化が  
高齢者軽視の風潮や高齢者虐待の原因とな  
るとも言われており、これらの現象が徐々  
に広まりつつあるわが国においては、高齢  
者イメージの悪化を抑制し、更には好転さ

せることが重要であると言えよう。しかし、  
人格形成期である未成年者、とりわけ人格  
的可塑性が高い幼児から小中学生の高齢者  
イメージについては、横断的な調査を行っ  
た先行研究がいくつか見られる<sup>1-3)</sup>ものの、  
実際に高齢者イメージを高めるための介入  
を行いその効果を縦断的に調査・検証した  
研究は、わが国では見あたらない。

本研究は、児童の高齢者イメージの現状、  
およびそのイメージに影響を及ぼす要因を  
明らかにすると共に、“REPRINTS”ボラン  
ティアの約半年間の活動によって、活動の  
対象となった児童の高齢者イメージがど  
のように変化したのかを検証することを目的  
とする。

#### B. 対象と方法

##### 1. 調査対象・方法

川崎市立 A 小学校、中央区立 B 小学校は

共に“REPRINTS”ボランティアの活動施設であり、A校では週2回、休み時間に図書室の一角で絵本の読み聞かせ会が開かれている。一方B校では週3回、朝の読書の時間に“REPRINTS”ボランティアが1～3年生の教室を訪問し、絵本の読み聞かせを行っている（各学年につき週1回）。両校において本研究への協力を得ることができたことから、各校で“REPRINTS”ボランティアが活動を開始した約1ヵ月後（A校：平成16年11月、B校：平成17年1月）に初回調査を、その約半年後（A校：平成17年5月、B校：平成17年9月）に追跡調査を行った。調査対象は、B校は両調査とも全児童であったが、A校は初回調査のみ全児童であり追跡調査では1年生を除外した。これは、5月の時点では1年生は入学直後であり、調査票を読むことも困難な場合があると考えたからである。対象者数は、A校が初回調査470人、追跡調査398人で、B校は両調査とも130人であった。

調査は、学級単位での集合自記式アンケートで行い、各学級の担任が質問を読み上げながら調査を進行した。A校では学級活動の時間に、B校では朝の読書の時間にそれぞれ行った。但し、初回調査におけるA校1・2年生は、保護者の監督の下での自宅回答とした。なお追跡調査では、調査当日欠席した児童に対しても担任が個別に調査を実施した。

主な調査項目は、①祖父母との同居経験、②祖父母等の高齢者との交流経験（3年生くらいまでの経験；11項目）、③SD（Semantic Differential）法による高齢者の情緒的イメージ尺度<sup>4,6)</sup>（12項目）、④「おとしより」であると思う年齢、⑤“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度（校内外でのあいさつ・会話・読み聞かせ）、⑥児童用社会的望ましさ尺度<sup>7,8)</sup>短縮版（10項目）である。初回調査ではこれら全項目を全員に対して質問したが、追跡調査では①・②は初回調査後に転入した児童に対し

てのみ質問した。

本研究で用いたSD尺度は、表1の12項目からなる。各対の語について、いずれが高齢者のイメージとしてよりあてはまるか、「とてもX」「どちらかといえばX」「どちらでもない」「どちらかといえばY」「とてもY」の5件法で回答を得、表中の下線の語をX、他方をYとし「とてもX」から「とてもY」まで5点～1点を与えた。各項目の得点（以下、SD得点）が高いほど一般的に肯定的なイメージを表す。

表1. SD法による高齢者イメージ尺度

- |                         |
|-------------------------|
| 1. <u>温かい</u> — 冷たい     |
| 2. 悲しい — <u>うれしい</u>    |
| 3. <u>正しい</u> — 正しくない   |
| 4. ひどい — <u>すばらしい</u>   |
| 5. 話しにくい — <u>話しやすい</u> |
| 6. 貧乏な — <u>お金持ちな</u>   |
| 7. <u>元気な</u> — 病気がちな   |
| 8. <u>良い</u> — 悪い       |
| 9. ひまそうな — <u>忙しそうな</u> |
| 10. おそい — <u>はやい</u>    |
| 11. <u>大きい</u> — 小さい    |
| 12. 弱い — <u>強い</u>      |

## 2. 分析対象・方法

### (1) 初回調査

有効回答を得られたのは、A校441人（有効回答率：93.8%）およびB校127人（同97.7%）であった。これら計568人を対象に、以下の分析を行った。

#### a) 背景因子の地域別基礎集計

個人属性および祖父母との同居経験・祖父母等の高齢者との交流経験について、 $\chi^2$ 検定ないしMann-WhitneyのU検定によりA校とB校を比較しつつ、児童の高齢者との交流に関する現状を記述した。

#### b) 児童の高齢者イメージの地域比較およびSD尺度の因子分析・信頼性分析

SD得点により表される児童の高齢者に対する情緒的イメージを、Mann-WhitneyのU検定によりA校とB校を比較しつつ現状を記述した。

また、本研究で用いた SD 尺度は、児童の高齢者イメージを表すのに適切と思われる項目を多数の候補の中から選出して作成されている。そこで、これを一次元の尺度として用いることが適切であるか、因子分析によりその内的構造を明らかにすると共に Cronbach の  $\alpha$  係数を算出してその信頼性を分析した。

#### c) SD 得点と背景因子の単相関分析

性別・学年・地域・祖父母との同居経験・高齢者との交流経験と、SD 得点（合計点／各因子得点）との単相関分析を行った（Spearman の順位相関係数  $\rho$  を算出）。

#### d) SD 得点と背景因子のロジスティック回帰分析

性別・学年・地域・祖父母との同居経験・高齢者との交流経験を独立変数、SD 得点合計点／各因子合計点を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。なお、“REPRINTS” ボランティアとの交流頻度・児童用社会的望ましさ尺度得点を調整変数として用いた。

#### (2) 追跡調査

有効回答を得られたのは、A 校 398 人、B 校 130 人（共に有効回答率 100%）であった。このうち、初回調査にも回答があった A 校 355 人、B 校 111 人の計 466 人を対象に、以下の分析を行った。

#### a) “REPRINTS” ボランティアとの交流頻度の地域別基礎集計

“REPRINTS” ボランティアとの校内外でのあいさつ、会話、読み聞かせを受けた頻度について、 $\chi^2$  検定ないし Mann-Whitney の U 検定により A 校と B 校を比較しつつ、児童とボランティアとの交流に関する現状を記述した。

#### b) SD 得点と “REPRINTS” ボランティアとの交流頻度の単相関分析

“REPRINTS” ボランティアとの交流経験と、追跡調査での SD 得点（合計点／各因子得点）および初回調査での SD 得点との差（合計点／各因子得点）との単相関分

析を行った（Spearman の順位相関係数  $\rho$  を算出）。

#### c) SD 得点と “REPRINTS” ボランティアとの交流頻度のロジスティック回帰分析

性別・学年・地域・祖父母との同居経験・高齢者との交流経験・“REPRINTS” ボランティアとの交流頻度を独立変数、追跡調査での SD 得点（合計点／各因子得点）および初回調査での SD 得点との差（合計点／各因子得点）を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。なお、児童用社会的望ましさ尺度得点、および追跡調査での SD 得点（合計点／各因子得点）を従属変数とした場合は初回調査での SD 得点を調整変数として用いた。

以上の統計処理は全て、SPSS13.0J を用いて行った。

### 3. 倫理面への配慮

本調査は主として児童の高齢者イメージを尋ねるものであるが、質問の内容によっては、質問自体が高齢者に対する否定的なイメージを児童に喚起させるという負の教育効果を生じさせるおそれがある。そこで、SD 尺度をはじめ全質問項目につき、各校々長に教育的視点からの判断を仰ぎ、適切とされた項目のみを用いた。

また、“REPRINTS” ボランティアとの交流により児童の高齢者イメージがどのような影響を受けるかを明らかにするためには、対象者個人を同定してイメージの変化を縦断的に観察する必要があるが、個人情報保護の観点からは個人を特定できない形でデータを取り扱う必要がある。そこで、対象者には調査ごとに ID 番号を付与した上、ID 番号と学籍番号の連結表・学籍番号と氏名の連結表は学校側が厳重に管理し、初回調査の ID 番号と追跡調査の ID 番号の対応データのみを当方が学校から受け取り両調査のデータを連結するという、連結可能匿名化処理を行った。

以上の手続きを踏まえ、東京都老人総合研究所倫理委員会による審査で承認された。

## C. 結果

### (1) 初回調査

#### a) 背景因子の地域別基礎集計 (表 2)

祖父母と現在同居している児童は A 校 17.1%、B 校 13.5%、過去に同居経験がある児童を含めると 25.2%、29.4%であった。

祖父母等の高齢者との交流経験は、「おもちゃや洋服を買ってもらう」「一緒に遊んでもらう」が高い経験割合を示す一方、「祖父母等とのみの泊まりがけの旅行」の経験割合は低かった。祖父母等の高齢者との交流経験で「あり」を各項目 1 点とした

場合の合計点 (11 点満点;  $\alpha=.76$ ) の mean  $\pm$  sd はそれぞれ  $6.7 \pm 2.7$ 、 $6.1 \pm 2.9$  であった。

地域で有意差があったのは、祖父母等との交流経験のうち「病気やけがのときに看病してもらったことがある」(60.2% vs. 44.1%,  $p<.01$ ) および「誕生日等に特別の食事・おやつを作ってもらったことがある」(65.4% vs. 52.8%,  $p<.05$ ) であり、いずれも A 校児童の方がより多かった。性別・学年人数を含めその他の背景因子については有意差は見られなかった。

表 2. 背景因子の地域別基礎集計

	A 校(郊外)	B 校(都心)	p
性別			
男	224 (50.8%)	61 (48.0%)	} n.s.
女	217 (49.2%)	66 (52.0%)	
学年人数			
低学年(1・2 年)	141 (32.0%)	46 (36.2%)	} n.s.
中学年(3・4 年)	157 (35.6%)	40 (31.5%)	
高学年(5・6 年)	143 (32.4%)	41 (32.3%)	
祖父母との同居経験			
同居経験あり	108 (25.2%)	37 (29.4%)	} n.s.
現在同居している	73 (17.1%)	17 (13.5%)	
過去に同居したことがある	35 ( 8.2%)	20 (15.9%)	
同居経験なし	320 (74.8%)	89 (70.6%)	
祖父母等の高齢者との交流経験(「あり」と回答した人数および%)			
泊まりがけの旅行(祖父母等とのみ)	119 (27.5%)	35 (27.6%)	n.s.
遊園地・映画・食事	282 (65.0%)	79 (63.2%)	n.s.
子供だけで家を訪問	253 (58.0%)	75 (59.1%)	n.s.
おもちゃや洋服を買ってもらう	404 (92.4%)	117 (92.1%)	n.s.
一緒に遊んでもらう	351 (80.3%)	101 (79.5%)	n.s.
童話・昔話を読んでもらう	268 (61.5%)	68 (54.0%)	n.s.
勉強を教えてもらう	250 (57.2%)	67 (52.8%)	n.s.
なぐさめてもらう・話を聞いてもらう	228 (52.4%)	54 (42.5%)	n.s.
看病してもらう	262 (60.2%)	56 (44.1%)	<.01
幼稚園・保育園の送迎	203 (46.6%)	58 (45.7%)	n.s.
誕生日等の特別の食事・おやつ	286 (65.4%)	67 (52.8%)	<.05
交流経験合計点(mean $\pm$ sd)	6.7 $\pm$ 2.7	6.1 $\pm$ 2.9	n.s.

表 3. 児童の高齢者イメージ・SD 尺度の因子分析

SD 項目	mean±sd		p	因子負荷量		
	A校(郊外)	B校(都心)		第1因子	第2因子	
すばらしい	— ひどい	3.8±0.9	3.9±1.0	n.s.	.649	.001
正しい	— 正しくない	3.9±0.9	4.0±0.9	n.s.	.639	-.115
良い	— 悪い	4.1±0.9	4.1±0.9	n.s.	.626	.031
温かい	— 冷たい	4.2±0.9	4.3±0.9	n.s.	.536	.011
うれしい	— 悲しい	3.6±1.1	3.4±1.0	<.05	.516	.047
話しやすい	— 話にくい	3.5±1.3	3.7±1.3	<.05	.387	.164
強い	— 弱い	2.9±1.1	3.2±1.2	<.01	-.122	.796
はやい	— おそい	2.7±1.1	2.8±1.1	n.s.	.042	.591
大きい	— 小さい	2.8±1.1	3.1±1.0	<.01	-.017	.534
お金持ちな	— 貧乏な	3.5±1.0	3.7±1.0	n.s.	.124	.339
元気な	— 病気がちな	3.7±1.2	3.7±1.2	n.s.	.293	.307
忙しそう	— ひまそう	3.3±1.3	3.3±1.2	n.s.	.207	.254
合計点		41.9±7.2	43.1±6.5	n.s.	因子間相関	.57

b) 児童の高齢者イメージおよびSD 尺度の因子分析・信頼性分析 (表 3・図 1)

地域で有意差があった個別の項目は、「うれしい—悲しい」「話しやすい—話にくい」(p<.05) および「強い—弱い」「大きい—小さい」(p<.01) であり、「うれしい—悲しい」は A 校児童の方が、それ以外は B 校児童の方がより肯定的なイメージを有していた。

SD 尺度 12 項目の合計点 (SD 得点合計点) の地域別分布を図 1 に示す。平均値については地域で有意差はなかった。

SD 尺度について因子分析 (主因子法・Promax 回転) を行ったところ、2 つの因子が抽出され、各因子に 6 項目ずつが帰属した。第 1 因子は道徳性・倫理性を表す項目との因子負荷量が高く、「評価因子」と考えられた。第 2 因子は力や動き・活動性を表す項目との因子負荷量が高く、「活動性・力量性因子」と考えられた<sup>9,10)</sup>。

SD 得点合計点、評価因子 6 項目の合計点 (評価因子合計点)、活動性・力量性因子 6 項目の合計点 (活動性・力量性因子合計点) の mean±sd は、それぞれ 42.2±7.1、23.1±3.9、19.0±4.3 であった。また、各合計点の  $\alpha$  係数はそれぞれ .80、.73、.69 であった。

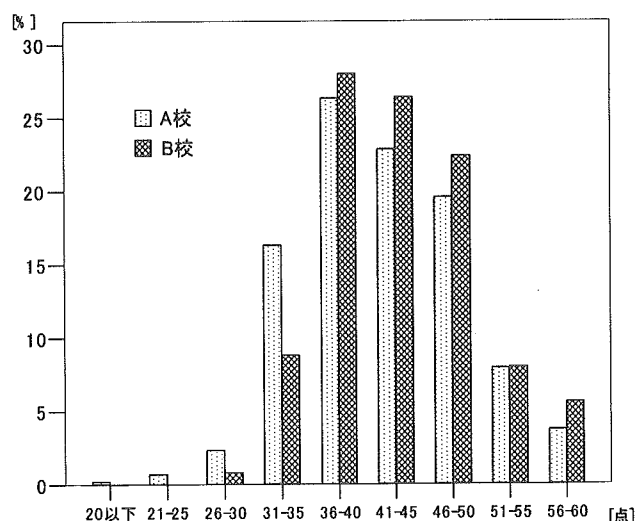


図 1 SD 得点合計点の地域別分布

c) SD 得点と背景因子の単相関分析 (表 4)

総合的により肯定的なイメージを有していたのは、低学年・B 校 (都心)・祖父母等との交流経験が多い児童であった (p<.01、地域のみ<.05)。より道徳性・倫理性の高いイメージを有していたのは、低学年・祖父母等との交流経験が多い児童であった (p<.01)。一方、より活動的で力強いイメージを有していたのは、低学年・男子・B 校 (都心)・祖父母等との交流経験が多い児童であった (p<.05、学年のみ<.01)。

表 4. 背景因子と SD 得点の単相関分析

	SD 得点 合計点 (n=524)	評価因子 合計点 (n=527)	活動性 ・力量性 因子合計点 (n=529)
性別(女子)	-.07	-.02	-.11*
学年	-.21**	-.17**	-.20**
地域(B校)	.09*	.04	.10*
祖父母との同居 経験(あり)	-.05	-.04	-.04
交流経験 合計点	.14**	.13**	.10*

\*\*: $p<.01$  \*: $p<.05$

d) SD 得点と背景因子のロジスティック回帰分析 (表 5・図 2・図 3)

SD 得点合計点・各因子合計点の分布について正規性の仮説が棄却された (Kolmogorov-Smirnov の検定) ため、各合計点を平均点で高低二群に分割し、ロジスティック回帰分析を行った。

SD 得点合計点の高低には学年および交流経験合計点が有意に寄与し ( $p<.05$  および  $<.01$ )、低学年・祖父母等との交流経験が多い児童ほど総合的に肯定的なイメージを有していた。評価因子合計点の高低についてもほぼ同様の傾向であった。一方、活動性・力量性因子合計点の高低に対しては性別および地域が有意に寄与し (共に  $p<.01$ )、男子・B校 (都心) の児童ほど、より活動

表 5. 背景因子と SD 得点のロジスティック回帰分析

	オッズ比	95%信頼区間
SD 得点合計点(n=507)		
学年	0.87*	0.76-0.99
交流経験合計点	1.12**	1.05-1.20
評価因子合計点(n=509)		
学年	0.83**	0.72-0.95
交流経験合計点	1.12**	1.05-1.20
活動性・力量性因子 合計点(n=512)		
性別(女子)	0.55**	0.38-0.80
地域(B校)	1.83**	1.18-2.84

\*\*: $p<.01$  \*: $p<.05$

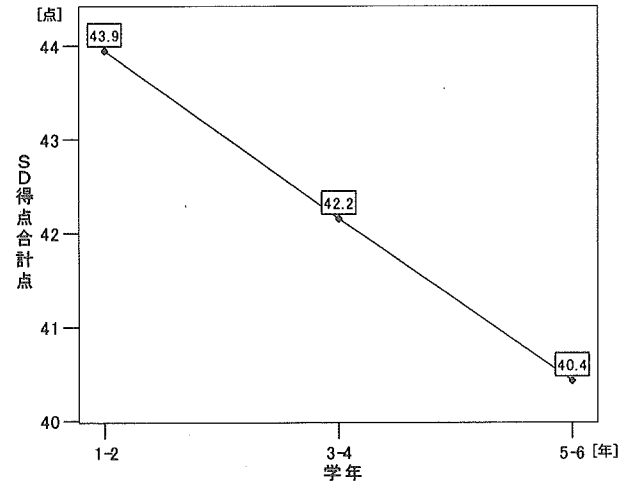


図 2 学年と SD 得点合計点の関連

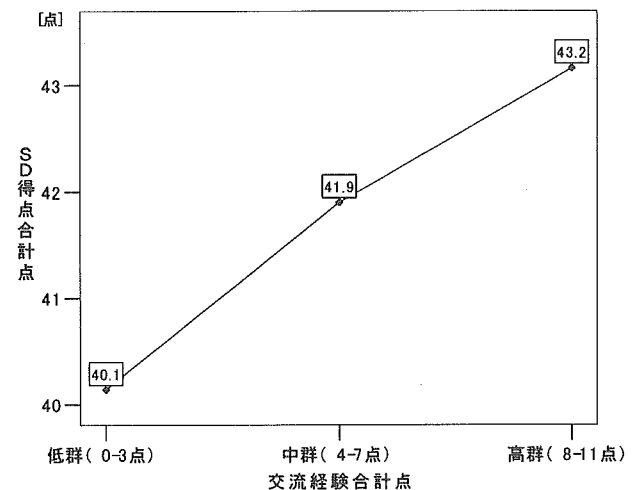


図 3 交流経験合計点と SD 得点合計点の関連

的で力強いイメージを有していた。学年・交流経験合計点と SD 得点合計点との関連を図 2・3 に示す。

## (2) 追跡調査

### a) “REPRINTS” ボランティアとの交流頻度の地域別基礎集計 (表 6)

校内でのあいさつを「よくする・時々する」と回答したのは A 校 69.3%、B 校 80.1%、校外でのあいさつは同じく 30.2%、14.4%であった。“REPRINTS” ボランティアとの会話が「よくあった・時々あった」と回答したのは A 校 50.0%、B 校 58.5%、読み聞かせは同じく 51.0%、81.9%であった。

表 6. “REPRINTS”ボランティアとの交流経験についての地域別基礎集計

	A 校(郊外)	B 校(都心)	p
<b>校内でのあいさつ</b>			
いつもする	70 (20.2%)	30 (31.5%)	} <.01
時々する	170 (49.1%)	54 (48.6%)	
しない	36 (10.4%)	2 ( 1.8%)	
見かけたことがない	70 (20.2%)	20 (18.0%)	
<b>校外でのあいさつ</b>			
いつもする	43 (12.1%)	6 ( 5.4%)	} <.001
時々する	64 (18.1%)	10 ( 9.0%)	
しない	34 ( 9.6%)	2 ( 1.8%)	
見かけたことがない	213 (60.2%)	93 (83.8%)	
<b>会話</b>			
よくあった	38 (10.8%)	21 (18.9%)	} n.s.
時々あった	134 (38.2%)	44 (39.6%)	
なかった	179 (51.0%)	46 (41.4%)	
<b>読み聞かせ</b>			
よくあった	48 (13.6%)	53 (47.7%)	} <.001
時々あった	132 (37.4%)	38 (34.2%)	
なかった	173 (49.0%)	20 (18.0%)	

校内外でのあいさつ・読み聞かせについては地域で有意差があり、校内でのあいさつ・読み聞かせは B 校の方が、校外でのあいさつは A 校の方がより交流頻度が高かった。

b) SD 得点と“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度の単相関分析 (表 7・8)

追跡調査での SD 得点については、校外でのあいさつと活動性・力量性因子合計点の相関を除き、すべて極めて有意な相関が見られた。読み聞かせが最も強い相関を示し、次いで校内でのあいさつ、会話、校外でのあいさつの順であった。

初回調査での SD 得点との差については、校内でのあいさつ・読み聞かせはすべて有意な相関が見られたが、会話は評価因子合計点の差との相関が有意ではなく、校外でのあいさつは逆に評価因子合計点の差との相関のみ有意であった。有意であったいずれの相関も、追跡調査での SD 得点との相関より弱かった。

表 7. REPRINTS ボランティアとの交流頻度と SD 得点 (追跡調査での得点)の単相関分析

	SD 得点 合計点 (n=449)	評価因子 合計点 (n=455)	活動性・ 力量性 因子合計 点 (n=458)
校内でのあいさつ	.29**	.33**	.14**
校外でのあいさつ	.13**	.16**	.02
会話	.24**	.21**	.20**
読み聞かせ	.35**	.36**	.25**

\*\*p<.01 \*p<.05

表 8. REPRINTS ボランティアとの交流頻度と SD 得点 (初回調査との差)の単相関分析

	SD 得点 合計点差 (n=437)	評価因子 合計点差 (n=446)	活動性・力 量性 因子合計 点差 (n=452)
校内でのあいさつ	.16**	.13**	.10**
校外でのあいさつ	.08	.09*	.03
会話	.12*	.06	.12*
読み聞かせ	.17**	.15**	.12*

\*\*p<.01 \*p<.05

c) SD 得点と“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度のロジスティック回帰分析 (表 9・10・図 4)

SD 得点 (合計点・各因子合計点) および初回調査との得点差の分布について正規性の仮説が棄却された (Kolmogorov-Smirnov の検定) ため、SD 得点については各々平均点で、得点差については 0 点で高低二群に分割し、“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度とのロジスティック回帰分析を行った。交流頻度は、校内外でのあいさつ (いつもする=3 点、時々する=2 点、しない/見かけたことがない=1 点) および会話・読み聞かせ (よくあった=3 点、時々あった=2 点、なかった=1 点) の合計点 (交流頻度合計点;  $\alpha=.70$ ) を投入した。

SD 得点合計点の高低には地域・学年および交流頻度合計点が有意に寄与し ( $p<.01$  および  $<.001$ )、B 校 (都心)、低学年、“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度が多い児童ほど総合的に肯定的なイメージを有していた。評価因子合計点の高低についてもほぼ同様の傾向であった。一方、活動性・力量性因子合計点の高低には学年のみが有意に寄与していた ( $p<.01$ )。

初回調査との得点差については、SD 得点合計点・評価因子合計点については地域のみが有意に寄与しており ( $p<.01$ )、B 校の方が初回調査よりイメージが肯定的な方向へ変化する傾向があった。しかし活動性 SD 得点合計点については有意に寄与する項目がなかった。

交流頻度合計点と SD 得点合計点との関連を図 4 に示した。交流頻度合計点を 0-2 点、3-5 点、6-8 点の 3 群に分けると、交流頻度が高くなるにつれ SD 得点も高くなる傾向が明らかである。

表 9. “REPRINTS”ボランティアとの交流頻度と SD 得点 (追跡調査での得点) のロジスティック回帰分析

	オッズ比	95%信頼区間
SD 得点合計点(n=391)		
地域(B 校)	2.31**	1.32-4.04
学年	0.73**	0.61-0.88
交流頻度合計点	1.28***	1.12-1.46
評価因子合計点(n=399)		
地域(B 校)	3.24***	1.87-5.63
学年	0.79*	0.66-0.95
「おとしより」と思う年齢	1.03*	1.00-1.06
交流頻度合計点	1.27***	1.12-1.45
活動性・力量性因子合計点(n=402)		
学年	0.74**	0.62-0.89

\*\*\*:  $p<.001$  \*\*:  $p<.01$  \*:  $p<.05$

表 10. “REPRINTS”ボランティアとの交流頻度と SD 得点 (初回調査との差) のロジスティック回帰分析

	オッズ比	95%信頼区間
SD 得点合計点差(n=391)		
地域(B 校)	1.91**	1.17-3.12
評価因子合計点差(n=399)		
地域(B 校)	2.31**	1.40-3.82

\*\*: $p<.01$

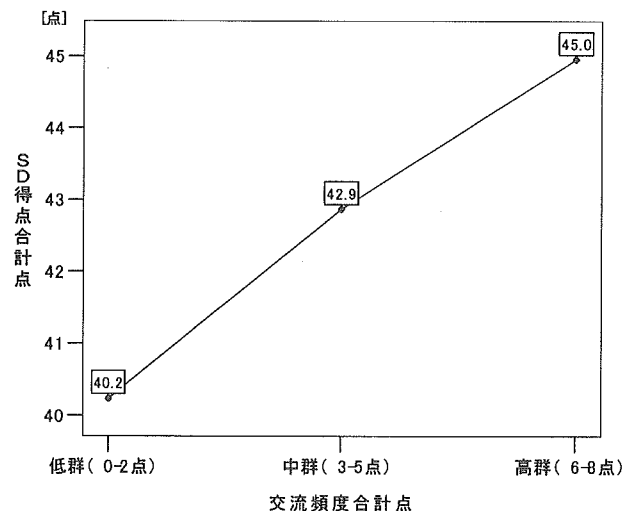


図 4 交流頻度合計点と SD 得点合計点の関連

## D. 考察

### (1) 初回調査

初回調査の結果から、①学年（年齢）が上昇するほど高齢者に対するイメージは有意に否定的であること、②小学3年生くらいまでに高齢者と交流をした経験が多いほど高齢者に対するイメージは有意に肯定的であること、③祖父母との同居経験の有無自体はイメージに影響を及ぼさないこと、が明らかになった。そして①②のイメージの傾向は、力強さや活動性よりも倫理性・道徳性を表すイメージの影響によるものであった。

“REPRINTS” ボランティアのメンバーの年齢（mean±sd=68.2±6.0）は、児童が「おとしより」と考える年齢（mean±sd=64.0±8.1）ないし児童の祖父母の年齢とほぼ同じである。“REPRINTS” ボランティアは主に各校の3年生以下の児童を対象に読み聞かせ活動をしているが、本研究の結果に鑑みれば、読み聞かせの対象となる児童が肯定的な高齢者イメージを抱き、高齢者への親しみや尊敬の念を深めるという活動目的に適うものであると考える。

### (2) 追跡調査

追跡調査からは、まず、校内外でのあいさつおよび読み聞かせの頻度について両地域で有意差があることが明らかになった。B校（都心）の方が校内でのあいさつの頻度が高かったのは、B校の方が学校規模が小さく、児童と“REPRINTS” ボランティアが出会う確率が高いことによると考えられる。同じくB校の方が読み聞かせの頻度が高かったのは、児童を集めるのではなく児童のいる教室を訪問しており、より多くの割合の児童に読み聞かせることができたことによると考えられる。一方、A校（郊外）の方が校外でのあいさつの頻度が高かったのは、A校は住宅地にあり、周囲がオフィス街のB校と比べ児童が学校周辺に滞在する割合・頻度が高いことによると考えられる。

次に、“REPRINTS” ボランティアとの交流頻度が高い児童の方が、高齢者に対するイメージ（とりわけ倫理性・道徳性に関するイメージ）が有意に肯定的であることが明らかになった。ただ、交流頻度と高齢者イメージの変化については有意な関連が見られなかったことから、“REPRINTS” ボランティアとの交流は児童の高齢者イメージに潜在的には肯定的な影響を及ぼしつつも、まだ約半年でははっきりとした変化として現れてきていないものと考えられる。

今後も継続的に観察していけば、“REPRINTS” ボランティアとの交流が児童の高齢者イメージに対して有意に肯定的な影響を及ぼす見込みが強いと考える。

## E. 結論

“REPRINTS” ボランティアによる絵本の読み聞かせ対象となった児童について、その高齢者イメージに影響する要因、および高齢者イメージの約半年間での変化を調べた。

低学年・祖父母等との交流経験が多い児童ほど、高齢者イメージが有意に肯定的であった。

また、“REPRINTS” ボランティアとの交流頻度が高い児童ほど高齢者イメージが有意に肯定的であったが、交流によって肯定的に変化したのかどうか、因果関係の解明は今後の課題である。

## [文献]

- 1) Koyano W. Japanese attitudes toward the elderly: A review of research findings. *Journal of Cross-Cultural Gerontology* 1989; 4: 335-345.
- 2) 吉田純子, 冷水豊. 児童と老人との交流. *社会老年学* 1991; 34: p3-12.
- 3) 中野いく子. 児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—. *社会老年学* 1991; 34: p23-36.
- 4) Jantz RK, Seefeldt C, Galper A, et al. The

CATE: Children's attitudes toward the elderly(Test Manual). University of Maryland, Collage Park. 1976.

- 5) 岩下豊彦. SD 法によるイメージの測定. 東京: 川島書店, 1983.
- 6) 井上正明, 小林利宣. 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 教育心理学研究 1985; 33(3): p253-260.
- 7) 鈴木真理子. 児童用 Self-Differential Scale の作製. 教育心理学研究 1974; 22(3): p171-175.
- 8) 桜井茂男. 児童用社会的望ましさを測定尺度(SDSC)の作成. 教育心理学研究 1984; 32(4): p311-314.
- 9) Osgood CE. Studies on the generality of affective meaning systems. American Psychologist 1962; 17: 10-18.
- 10) Thomas EC, Yamamoto K. Attitude toward age: An exploration in school-age children. International Journal of Aging and Human Development 1975; 6: p117-129.

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者における世代間交流ヘルスプロモーションプログラム-“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌(投稿中).

### 2. 学会発表

藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-1. デザインと評価-. 第47回日本老年社会学会大会, 東京, 2005.6.15-17.

西真理子, 藤原佳典, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-2. ボランティア養成セ

ミナーの効果-. 第47回日本老年社会学会大会, 東京, 2005.6.15-17.

井上かず子, 藤原佳典, 西真理子, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-3. KJ 法による活動の質的評価-. 第47回日本老年社会学会大会, 東京, 2005.6.15-17.

渡辺直紀, 藤原佳典, 西真理子, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-4. 児童の高齢者イメージ-. 第47回日本老年社会学会大会, 東京, 2005.6.15-17.

藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-1. デザインと概要-. 第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌, 2005.9.14-16.

李相侖, 藤原佳典, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”-2. 社会活動性全体との関連-. 第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌, 2005.9.14-16.

## G. 知的所有権の取得状況

なし

### [研究協力者]

渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 井上かず子, 大場宏美, 堀越真紀子, 吉田裕人.

(東京都老人総合研究所・社会参加とヘルスプロモーション研究チーム)

新垣英一, 鈴木幹男. (川崎市立下布田小学校)

向山行雄, 古川卓也, 佐久間明子. (中央区立阪本小学校)

厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)

分担研究報告書

都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”

— 4.「高齢者と児童の交流授業」を通じた6年生児童における高齢者のイメージの変化 —

分担研究者 西川 武志

北海道教育大学教育学部・医科学看護学部門

【要旨】目的：短期間の集中的な介入「高齢者と児童の交流授業」(以降、交流授業と称する。)をおこなうことにより、これまで「読み聞かせ」の対象となっておらず交流の機会が少なかった6年生児童における高齢者に対するのイメージの変化を調べること。

方法：神奈川県川崎市立S小学校の6年生(2005年度卒業生)2クラス全70名を対象に、平成18年2月、交流授業(シニアボランティア1人が、6年生児童5人ずつを担当し小グループを構成し、低学年児童への読み聞かせの方法について実技指導とミーティングを行った。計45分×6回)

結果：過去3回の調査では第1回から第2回調査で高齢者のSD尺度は総得点および活動性・力量因子得点で有意に低下し、第2回から第3回も低下傾向を認めた。しかし、交流授業後で、両得点は有意に改善した。

結論：高学年ほど“REPRINTS”シニアボランティアとの交流の経験や親近感は低下していた。しかし、本交流授業にみられるような介入(短期間であっても集中的な交流)により6年生における高齢者のイメージの低下が改善もしくは抑制された。

#### A. 研究方法

“REPRINTS”は、2004年10月以降、主に公立小学校低学年児童を対象に「絵本の読み聞かせ」を通じた定期的な訪問・交流活動を行なうシニアボランティア・プログラムである。その期待する効果の一つに児童への敬老観の普及・定着がある。“REPRINTS”導入校である川崎市立S小学校では全校児童を対象に

“REPRINTS”(S小学校を担当する小ボランティア・グループは“おむすび”と称されている)導入後6ヶ月ごとに高齢者へのイメージを問うアンケート調査をこれまで計3回実施してきた。4回目のアンケート調査の前に、短期間の集中的な介入「高齢者と児童の交流授業」(以降、

交流授業と称する。)をおこなうことにより、これまで比較的交流の機会が少なかった6年生児童における高齢者に対するのイメージの変化を調べること。

#### B. 研究方法

対象：神奈川県川崎市立S小学校の6年生(2005年度卒業生)2クラス全70名である。調査で用いた尺度は、1)SD(Semantic Differential)尺度(5件法)短縮版による高齢者に対する情緒的なイメージ11項目(得点の範囲11~55点)(表1)と2)認識的なイメージを問う老人観尺度短縮版7項目(得点の範囲0~7点)(表2)である。

表1. SD (Semantic Differential) 尺度短縮版：高齢者に対する情緒的イメージ尺度

評価因子：【良い】-悪い／【すばらしい】-ひどい／【温かい】-冷たい／【正しい】-正しくない ／【うれしい】-悲しい／【話しやすい】-話にくい 活動性・力量性因子：【強い】-弱い／【はやい】-おそい／【大きい】-小さい ／【元気な】-病気がちな／【忙しい】-ひまそうな
---

【予備解析】情緒的イメージ・SD尺度短縮版の因子分析および信頼性分析：  
 上記、表1の11対の語について、いずれが高齢者のイメージによりあてはまるかを5件法（とてもX-どちらかといえばX-どちらでもない-どちらかといえばY-とてもY）で尋ねた。表中の下線の語をX、他方をYとし、「とてもX」から「とてもY」まで5点～1点を与えた。得点が高いほど一般的に好ましいイメージを表す。11項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行ったところ、道徳性・倫理性を表す「評価因子」と力や動き・活動性を表す「活動性・力量性因子」が抽出された。12項目の合計点（SD得点合計点）、評価因子6項目の合計点（評価因子合計点）、活動性・力量性因子6項目の合計点（活動性・力量性因子合計点）の平均±標準偏差は、それぞれ38.0±7.2, 26.1±4.7, 11.7±2.8であった。  
 また、各合計点についてCronbach's  $\alpha$  を算出したところ、それぞれ0.79, 0.75, 0.67であり尺度としての信頼性が確認された。

表2. 老人観尺度短縮版：高齢者に対する認識的イメージ尺度

- ① もう一度若くなりたいと願っている
- ② 忘れっぽい
- ③ ひとりぼっちだ
- ④ 自分の健康について心配している
- ⑤ 病気で寝ていることが多い
- ⑥ まわりの人から尊敬されている
- ⑦ 豊かな経験や知識をもっている

【予備解析】認識的イメージ・老人観尺度の信頼性分析：  
 高齢者一般の描写や特性に関する質問文に対して、「はい-いいえ」ないし3～7分割法により答えてもらうことで、高齢者に対するイメージの認識的側面を数量的に測定するものである。イメージは、各項目の個別得点および合計得点で評価する。合計点について平均±標準偏差は4.1±1.3であった。Cronbach's  $\alpha$  を算出したところ0.34であり、尺度としての信頼性は十分ではなかった。

**交流授業(介入プログラム)：**「総合的学習」の授業プログラムとして2006年2月16日～3月3日に計6校時(1校時45分)行なわれた。交流授業のプログラムが企画された経緯およびその内容は以下の通りである。2005年12月初め、卒業記念企画の一環として6年生が在校生(1～3年生)に絵本を「読み聞かせ」しようと考案した。既に同校で活動中のシニアボランティア「りぷり

んと・おむすび」の全7名に絵本の選択法や読み聞かせの技術の指導を依頼した。クラス担任教諭がコーディネーターとなり、ボランティア1人が、2クラスとも児童5人ずつを担当し小グループを構成し、実技指導とミーティングを繰り返し(写真1～4)。

交流授業最終回の終了後に、第4回アンケート調査を実施した。



写真1. 交流授業前に担任教諭と入念な打合せを行うシーン。

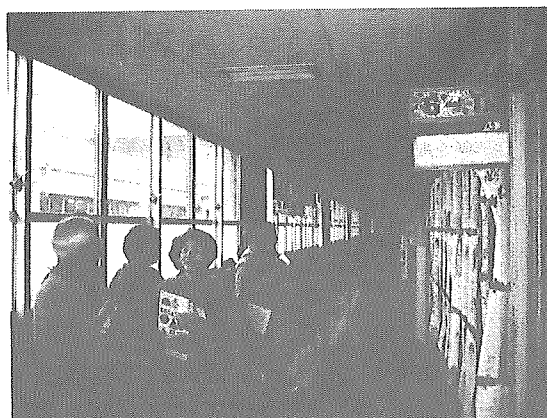


写真2. 授業直前にメンバー同士が最終確認。



写真3. 児童からの質問に答えながら絵本の持ち方や読み方を指導するシーン。

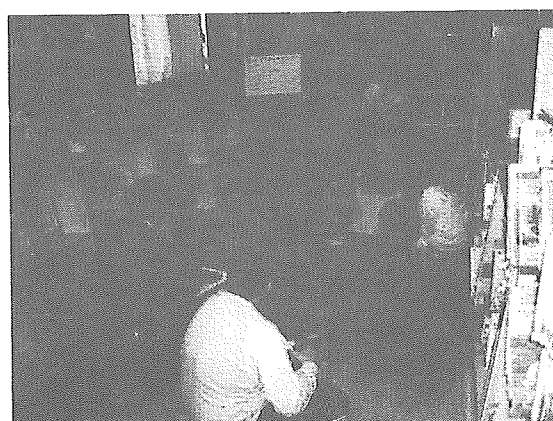


写真4. 指導した6年生が1年生に読み聞かせをしている様子をチェックするシーン。

**分析方法:**第1回から第4回アンケートまでの各アンケートの前後で両尺度の得点変化の有意性を反復測定(対応のある因子)による一元配置分散分析および多重比較を用いて判定した( $p < 0.05$ )。

#### 《倫理面への配慮》

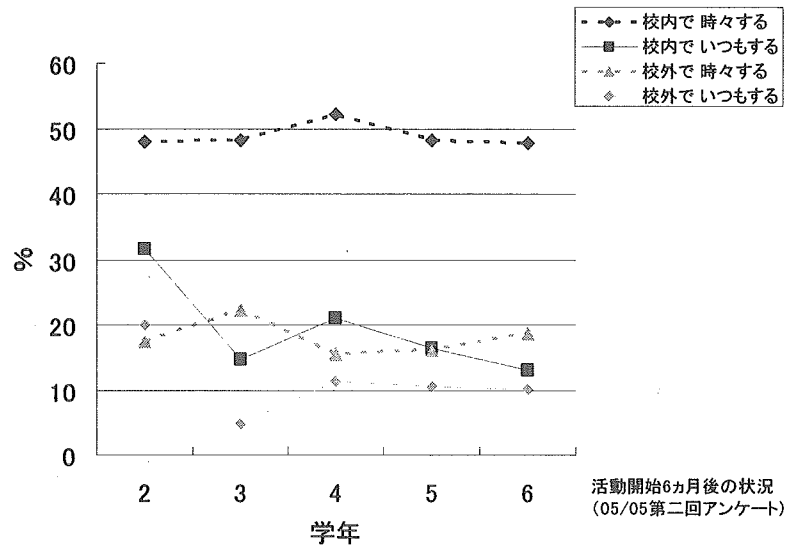
シニアボランティア(対象者)に対しては既に“REPRINTS”開始時に研究に関連する各種調査に協力する主旨の同意書を得ている。本交流授業実施前に、本研究の説明を行い、再度、内容の確認を促した。児童側へのアンケートは

既に東京都老人総合研究所の倫理委員会において承諾済みである。実施に先立ち、学校通信等を用いて保護者へ周知・理解を図った後、当該学校長の監督・指示のもとで、担任教諭がアンケートを実施した。

#### C. 結果

第2回アンケート(活動開始6ヵ月後)におけるシニアボランティアに対して挨拶をする児童の割合は「校内では時々する」が全学年通して50%前後であった。「いつもする」は高学年ほど低下する傾向にあった(図1)。

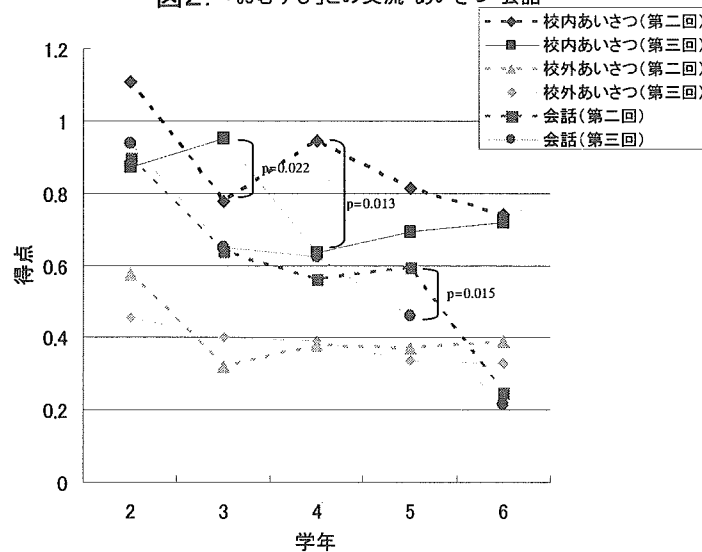
図1. 「おむすび」との交流-あいさつをする児童の割合



次に、シニアボランティアとの交流に関する項目を得点化した。校内であいさつする習慣、校外であいさつをする習慣(いつもする:2点、時々する:1点、しないまたは見かけたことがない:0点)、会話をする経験(よくあった:2点、時々あった:1点、なかった:0点)、読み聞かせ参加経験(よくあった:2点、時々あつ

た:1点、なかった:0点)、読み聞かせが楽しみと思う(とても楽しみ:3点、楽しみ:2点、どちらともいえない:1点、楽しみでない:0点)の5項目にそれぞれ配点した。総得点についてCronbach's  $\alpha$ を算出したところ0.76であり尺度としての信頼性は十分であった。

図2. 「おむすび」との交流-あいさつ・会話-



2～6年生について前回(第二回)と比較すると、3年生で校内でのあいさつと読み聞かせ経験の割合は有意に増えた。他の学年ではあいさつ経験・会話経験・読み聞かせが楽しみと思う割合が減少する傾向にあったが、いず

れの傾向も統計的には有意ではなかった。会話経験・読み聞かせ経験・読み聞かせが楽しみと思う割合は、学年が上がるにつれ統計的にも有意に減少していた。

図3.「おむすび」との交流-読み聞かせへの参加・期待-

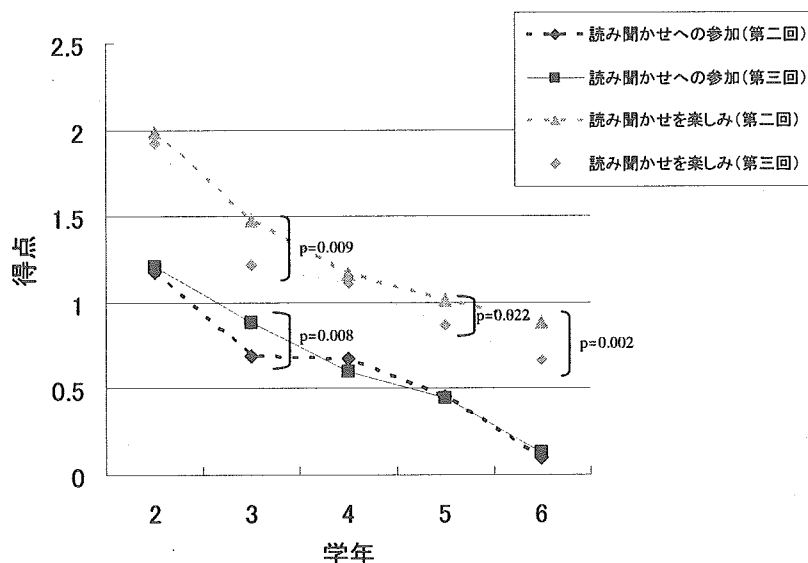
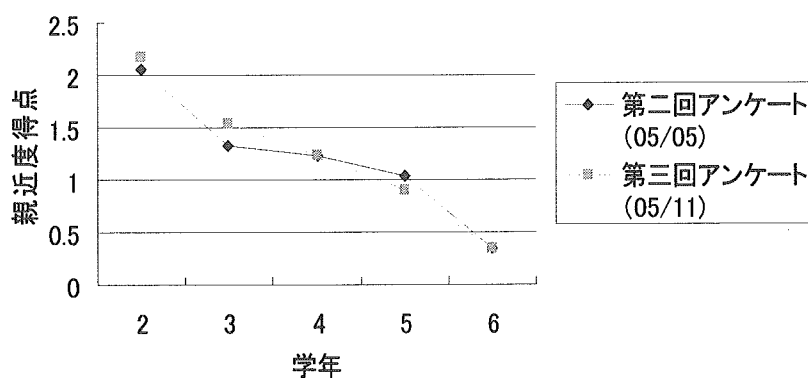


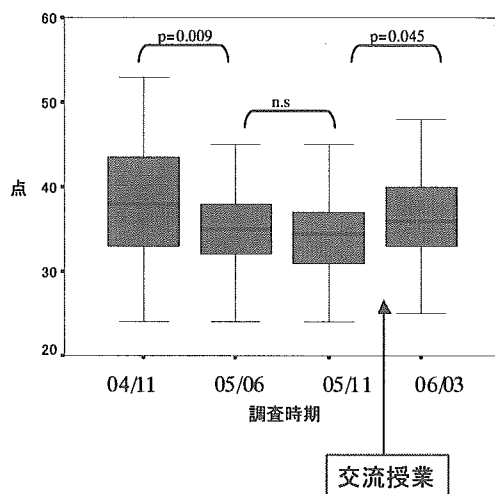
図4. 学年別にみた「おむすび」との親近度総合得点



第1回～第3回調査および、交流授業後(第4回調査)の結果を図5に示した。過去3回の調査では第1回から第2回調査で高齢者のSD尺度は総得点および活動性・力量性因

子得点で有意に低下し、第2回から第3回も低下傾向を認めた。交流授業後で、両得点は有意に改善した(p=0.045)。

図5. 「高齢者と児童の交流授業」による6年生の高齢者に対する効果  
—情緒的イメージ総得点(SD法11項目)—



\* 得点が高いほど「良好」なイメージがあることを示している

SD尺度の評価性因子得点では有意水準には 老人観尺度では変化がみられなかった。  
至らなかったが( $p=0.39$ )、改善傾向がみられた。

図6. 「高齢者と児童の交流授業」による6年生の高齢者に対する効果  
—情緒的イメージ・評価因子と活動性・力量性因子(SD法)—

